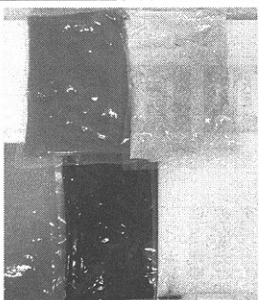


発酵野菜ベーストは漬物製造で培った野菜加工や乳酸発酵のノウハウを生かし、ホウレンソウ草やトマト、里芋、ニンジン



「どるどる」は漬物加工をベースとした野菜加工品。現在は自社製「シェラト」シリーズ(ロアレ)に

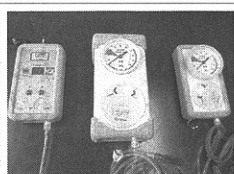
けに使用している。外販を狙って量産体制を整備し、用途を開拓する。価格は今後詰める。発酵食品には整腸作用があることされているため、通常の野菜ベーストよりも健康に良いことを訴求する。アキモは漬物をはじめとする野菜加工食品を手がける。主力製品である浅漬は賞味期限が1〜2週間と短いため、販売先は栃木県内を中心とした関東地域のスーパーや

事業展開を目指す。

最適値を簡単設定

徳器技研 カフ圧調整器発売

【大分】徳器技研工業(大分県宇佐市、徳永修一社長、0978-333-5595)は3月に「カフ圧計」「カフチェック」「11写真」とカフ圧自動調整器「カフキーパー」を発売する。医療機関や在宅医療で、人工呼吸器などを防ぐ患者の呼吸漏れなどを防ぐ気管チューブのカフ圧管理に利用する。消費税抜きの価格は3万10万円程度。初年度の販売目標は10万台。カフキーパーはジョブで空気を補充、



排出してカフ圧を管理する。カフキーパーとカフフィットはカフ圧の自動調整機能がある。カフキーパーはジョブポンプで、カフフィットは電動で内蔵する補充袋、ポンプに空気を補充する。それぞれカフ圧値を表示し、20〜30分程度の最適値を容易に設定できる。既存市販器が長時間にわたってカフ圧を調整保持できない課題を改良し、商品化した。同社は医療・福祉介護機器メーカー。

伊藤製作所

3

新工場を計画

1980年代後半になると、田高や顧客の海外進出などにより、倒産する金型メーカーが続出した。伊藤製作所社長の伊藤澄夫は、このまま日本にいてもいつかつぶれると、95年に海外進出を目指すことにした。

最初は自動車関連企業が多いたいを検討した。しかし、大学卒の人材が確保できないなどの理由から断念。そこで日系の金属プレ加工メーカーや金型メーカーが少なく、親日の国であるフィリピンに着目した。伊藤は旧知の中国系フィリピン人と96年に合弁会社「イトー・フォークス」を設立。マニラ市内の倉庫でプレス金型と部品の生産を始めた。フィリピン進出の選択は正しかった。現地には品質

フィリピン進出を選択



の良い金型やプレス部品を、後に最大のピンチが襲った。伊藤は現地に駐在していた社長の加藤幸が心臓病で、作業員採用などの業務に打

フィリピンで高急死したのだ。伊藤は自分の片腕と考えていただけにショックだった。さらに追い打をかけたのは親日の国、フィリピン。サライヤに代わる人材が伊藤製作所から多くの注文が入った。業績は順調で、マニラ市から南に50キロ離れた輸出加工区に新工場を建設として再スタート。日本からする計画を立てた。だが、契約した2人の技術者を派遣し、伊藤は国内から指示を送る。派遣された社員は選考、品質管理、建設の指示、従業員採用などの業務に打

苦境乗り越える

フィリピン現地法人は伊藤製作所の子会社として再スタート。日本から営業課長や伊藤の長男、2人の技術者を派遣し、伊藤は国内から指示を送る。派遣された社員は選考、品質管理、建設の指示、従業員採用などの業務に打

ち込んだ。この努力が実り、03年1月に新工場は無事稼働した。伊藤は「苦境を乗り越えたのは親日の国、フィリピンだったから」と力を込める。とかく外国人は愛社精神がないと言われるが「フィリピン人は家族的で日本人に対して誠意や感謝の気持ちを持っている(伊藤)」。同社の特徴は「現地の法人は、現地社員と家族のなつきあいを続け、血の通った関係」を大切にしている。経営によって、離職する社員はほぼゼロという。優秀な人材に満足していた。だから他の国への進出は考えていなかった。しかし12年、新たな国への海外進出を決断する。このことになる。(敬称略)

親日の国で成功おさめる



中小企業のものごと